九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ナチスの農村進出と農民 : ヴァイマル共和制末期におけるテューリンゲン州を中心に

熊野, 直樹
九州大学大学院法学研究科助教授

https://doi.org/10.15017/2204

出版情報：法政研究. 67 (2), pp.39-79, 2000-11-17. Hosei Gakkai (Institute of Law and Politics) Kyushu University
バージョン：
権利関係：

ナチスの農村進出と農民

――ヴァイマル共和制末期におけるテューリンゲン州を中心に――

熊　野　直　樹

序
一　テューリンゲン農村同盟と農民
二　ナチスの農村進出と農民
三　テューリンゲン農業会議所選挙と農民
四　農民間の「私闘」（フェーデ）と農村内の「平和」
結

序

ナチスが農村に進出するに際して、農村はそもそもいかなる状態にあったのだろうか。そしてナチスが農村に進出することによって、いかなる変容が農村内に生じたのだろうか。その際、農村内の住民のなかでも、とりわけ政治的、経済的、そして社会的にも中心的な役割を担っていた農民は、ナチスの農村進出に対していかなる反応を示したのだろうか。本稿[1]の目的は、以上のことを検討することにある。

従来、ヘベルレの研究以来、北ドイツをはじめ中部ドイツを含む中小農民主体のプロテスタントの農村部において、ナチスが大躍進を遂げたことは、ほぼ通説化している。確かに、選挙の上では、ナチスが多くの票をこれらの地域の農村部から獲得しているのは事実である。しかし、農村部（Landkreise）とはあくまでも都市部（Stadtkreise）に対する選挙統計上の対概念である。しかも、そこには別に農民だけが住んでいたわけではないし、逆に農民がわずかしか住んでいない場合もあった。農村部を、即、農村共同体（Dorfgemeinschaft）だけの集合体と見なすことには慎重であらねばならないし、農村の住人を、即、農民と捉えることにも慎重であらねばならない。農村には農民（Bauer）といわれる農場の所有者ないしは農業経営者で独立的に専ら農業で生計を営む者のほかに、兼業の零細農民、農業労働者、工場労働者、奉公人、季節労働者、自営業者や手工業者なども数多く住んでおり、農村部の票をそのまま農民の票と見なすことにも慎重であらねばならない。これまでの研究の多くが、自明の前提として、農村部の動向でもって農村全体ないしは農民の動向とみなしてきたことも否定できない。本稿では、厳密にこれらを区別して、農村部の動向ではなく、農村における農民の動向を中心に検討していきたい。

というのは、既に別稿において強調したように[2]、ヘベルレの研究以来、ナチスの大衆的な支持基盤として農民が指摘され、農村内の農民がまるごとナチ化していった、というイメージが流布しているからである。果たして本当に農村内

の農民はそのまますんなりとナチ化していったのか、しかも、農村内の農民はかくも受動的にすんなりとナチズム、すなわちナチスの思想・運動・体制を受け入れたのか、が問題となる。その際、さらに問題となるのが、そもそも農村のナチ化とは具体的には何を指し、農民のナチ化とは実際にはどういう状態を意味するのか、ということであろう。逆にいえば、農民のナチス支持とは一体どの程度のものであったのか、ということである。こうした問題を、とりわけ農民のナチス支持の実態を、できるだけミクロに考察するのが、本稿の主要な目的となる。ここでは、具体的に中部ドイツ、とりわけテューリンゲン（Thüringen）州を取り上げ、以上の問題について検討を加えていくことにしよう。

ここでテューリンゲンを取り上げる理由は、同州が、北部ドイツと同様、ナチスの大躍進の典型とされる中小農民主体のプロテスタント農業地域であるという事実のほかに、ナチスと農民との関係を考えるうえで、以下のような興味深い歴史的事実が同地域に存在したことによる。すなわち、テューリンゲンは、一九三〇年一月に、ドイツ史上初めてナチスが州政府に参加した地域であり、その際のナチスの主要な連立相手が、テューリンゲン農村同盟（Der Thüringer Landbund）という全国農村同盟（Reichs-Landbund）傘下の地方の農民団体であったこと。それをもたらした要因の一つに一九二九年一二月の州議会選挙での農村部におけるナチスの得票数の増大があり、従来、これが農民のナチス支持ともみなされてきたこと。さらにテューリンゲンは、ヘッセン（Hessen）州やバイエルン（Bayern）州と並ぶ農民運動の中心地で、農民の政治的自立性はきわめて強く、その農民団体がナチスと激しい競合関係にあったこと。しかも、テューリンゲンは、地理的に北ドイツと南ドイツとの中間に位置しているために、ナチ党再建後、ヒトラーによって「北と南との結束点」（Bindeglied zwischen Norden und Süden）とみなされ、しかもナチスの「ドイツの牙城」（Hochburg Deutschlands）になり得ると位置づけられており、[3] 彼によって直接任命された大管区指導者フリッツ・ザウケル（Fritz Sauckel）指導の下、ナチスの農村進出が全国に先駆けて活発に行われていた地域の一つであったこと。以上による。

さて、上で述べた問題設定に基づいた研究は、管見の限りでは、殆ど存在しない状態である。その理由は、テューリンゲンの農民ならびに農村の史料が決定的に欠落しているからである。とりわけ、ヴァイマル共和制期における農民ならびに農村の動向を示す史料は、ナチズム期と比べて決定的に欠けている。しかし、この間、テューリンゲンにある六つの州立文書館を調査した結果、不十分ながらも幾つかの関連史料を「発掘」できたので、ここでは、これらの史料群に依拠しながら、上記の問題に接近していきたい。

しかし、当該テーマそのものに関する研究が皆無とはいえ、幾つかの研究は大きな示唆と重要な情報を与えてくれる。例えば、ドレッセルの一九九六年に出されたテューリンゲン農村同盟に関するモノグラフィーは、テューリンゲン農村同盟に関する史実の発掘とその歴史についての大まかな把握という意味で役に立ったし、[4] 同年のピータによるプロテスタント地域における村落共同体と政党政治に関する研究における農村でのオピニオンリーダーの政治的役割に関する研究は、本稿に有益な分析視角を提供してくれている。[5] さらに一九九七年に出版されたドーンハイムのテューリンゲン農業とナチスとの関係についての研究も、同州のナチスの農業政策を知る上で、はなはだ有益であった。[6] さらに、同年我が国で出版された足立芳宏氏による農業労働者に関する研究書は「農村＝農民」という見方を相対化する視点を与えてくれている。[7] 一九九八年に出版されたメルケニヒの全国農村同盟に関する著書は、ナチスと農村同盟との関係をライヒ規模で捉える際に、必要不可欠な文献である。[8] また、同年発表された伊集院立氏の東エルベ地域のポメルンにおける農村の変容とナチスの農村労働者政策についての研究は、農村の変容過程を考察する際に重要な分析視角を提示してくれている。[9] 今や古典的な論文ともいえるギースやファクハーソンのナチスの農村進出に関する研究[10]ならびに豊永泰子氏のナチスの農村政策に関する研究[11]は、ナチス側の政策を知る上ではいまだに必読のものである。しかし、これらすべての研究に共通する点は、ナチスの農村進出によるテューリンゲン農村内部の変容とそれに対する農民の反応という視点で書かれていないことである。もちろん、この点は、各論者の問題意識ならびに分析視角の相違から由来するものであり、

外在的な批判にすぎない。本稿では、農村の変容の問題を農民の政治的動向に焦点を併せつつ検討するものである。

しかし、その際、農村の変容の問題については、残念ながら史料的な制約上、幾つかの農村をケース・スタディーとして具体的に取り上げて、その変容の過程を探るということはできなかった。本稿では、農村の内部史料ではなく、外部の観察者の史料しか依拠できなかったからである。そのため、農村の変容については、専ら外部の、しかも政党・団体指導部や官憲をはじめとしたいわゆる「外からの」視点でみた史料でしか検討できなかった。現段階においては、本稿のテーマに最適な農村史料は見出していない。それ故、農村内部からみた個別具体的な農村の変容の問題については、今後の課題としつつ、本稿では、当時の政党ならびに政治団体の指導者間で問題視ないしは重要視されていたテューリンゲンの農村の一般的な問題状況が取り上げられるにすぎないことを、あらかじめお断りしておきたい。

一　テューリンゲン農村同盟と農民

ヴァイマル共和制におけるテューリンゲンでは、ナチスが抬頭する前までは、テューリンゲン農村同盟という農業利益団体で、かつ政治団体でもあったユニークな組織が、テューリンゲンの中小農民の大部分を傘下に治めており、農民主体の農村社会において政治的、経済的、社会的に大きな影響力を誇示していた。それ故、ヴァイマル共和制末期の農村の変容と農民の政治的動向について述べるには、テューリンゲン農村同盟と農民との関わりについての検討は不可欠である。

テューリンゲン農村同盟は、そもそも一九一八年の革命に際して、革命による土地の没収を防止し、自分たちの農地を維持するために各農村で農民によって、自然発生的にかつ自立的に結成された反革命的な団体が一九一九年に大同団結して結成したものであった。そこでは、戦時ならびに革命下における統制経済（Zwangswirtschaft）への拒否及び

国家による農業経営への介入に対する断固たる拒否が、さらには「自由な農地に基づいた強固な自由農民の維持をめぐる闘争」がテューリンゲン農村同盟の重要な基本理念とされた。こうした理念の下、テューリンゲン農村同盟は三分の二以上の中小農民（農用地面積が二ヘクタールから二〇ヘクタール）約四万人を掌握し、大土地所有者ならびに零細農民の農用地面積比が高い地域を除いて、基本的にテューリンゲンの大部分の中小農民主体の農村地域に大きな影響を及ぼしていた。テューリンゲンにおけるテューリンゲン農村同盟の農民に対する政治的影響力の強さは、テューリンゲン農村同盟が独自でテューリンゲン州議会に議員を送り出し、しかも議会内第二党の勢力を誇っていたという事実からも窺える。例えば、初めて開かれた一九二〇年の州議会選挙においては、テューリンゲン農村同盟は、独自の候補者リストを出して一三万票（二〇％）を得て、一一議席を獲得し、さらには、一九二四年には国会選挙においても独自の候補者を出して二名ほど国会に送り出しているほどの組織力と自立性を誇っていた。[12]

テューリンゲン農村同盟の農村における政治的影響について、当時の保守政党であったドイツ国家国民党（Deutschnationale Volkspartei）は、次のように表現している。

「プロパガンダ目的で、各地区支部に所属している末端の支部代表者すべての住所録がすぐに必要である。（……）（しかし）純農村的な性格を伴った地域は、ますます重要ではなくなっている。というのは、そこでは農村同盟が既に開拓してしまっているからである。[13]」（括弧内筆者）

テューリンゲン農村同盟は、郡農村同盟（Kreislandbund）―地区農村同盟（Bezirklandbund）―末端支部（Ortsgruppe）という形で、農民を組織し、定期的に会員の集会を各支部ごとに開いていた。しかも会員の拡大にも努めており、会員になりたがらない農民の「ブラックリスト」を作成し、テューリンゲン農村同盟の会員がおもに利用する販売路から彼らを締め出し、いわば「村八分」にし、しかもその農民の酪農・畜産品を買わないという不買運動すら展開していたほどであった。[14] テューリンゲン農村同盟の郡単位の下部組織であるヴァイマル農民同盟（Weimarischer

Bauernbund）は、以下のように会員に呼びかけている。

「畜産農家であるにもかかわらず、農民同盟の会員たることを必要だと思わない農業経営者がいる。そのような農業経営者はボイコットされねばならない。そのような我が農村同盟の裏切り者のところで、同盟員は、もはや何も買ってはならない。[15]」

テューリンゲン農村同盟は、農業会議所（Landwirtschaftskammer）と密接に関わり、その幹部会のメンバーや各地区の農業会議所の会頭や委員にはテューリンゲン農村同盟の会員が殆ど占めていた。この農業会議所は、農民の日常的な農業技術の指導から販売路、さらには経営上の問題などの相談機関にもなっており、当時の農民にとっては、農業経営を行う上で、農業会議所は必要不可欠な存在であった。テューリンゲン農村同盟は、こうした日常的な農業経営上のアドヴァイスを行う農業会議所ならびにそこでの活動をも通じて、テューリンゲンの農民への影響力を維持・強化していたのである。逆にいえば、農業経営上必要なノウハウを独占することによって、テューリンゲン農村同盟は農民に対する政治的・経済的影響力を確保していたともいえよう。それ故、当時の農民にとっては、農業経営上ならびに農村社会におけるテューリンゲン農村同盟の影響の大きさ故に、その政治的、経済的動向は無視し得ず、それに従わざるを得なかった面も多かったと考えられる。

そこで、ここでは、テューリンゲン農村同盟の政治的影響力がとりわけ強かったシュタットローダ（Stadtroda）という郡部（Kreis）での郡農業会議所（Kreislandwirtschaftskammer）の活動を取り上げることによって、テューリンゲン農村同盟の農村社会における影響の実態についてもう少し詳しく見ていこう。

当時テューリンゲンには、経済相談所（Wirtschaftsberatungsdienst）という機関が農業会議所内に置かれていた。この相談所には全州で約八〇名規模の経済顧問官（Wirtschaftsberater oder Landwirtschaftsberater）がおり、[16]彼らが日常的に各農村をそれぞれ巡回し、そこにおいて農業技術に関する講習及び指導ならびに経済問題に関する相談を

行っていた。ヴァイマルのテューリンゲン中央州立文書館（Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar）に所蔵されている当時の経済顧問官による報告書[17]を見ると、この講習や相談には村の農民の多くが、参加していた模様である。実は、この経済顧問官は、時々、村でなされたテューリンゲン農村同盟の会員集会にも参加していたのである[18]。既に指摘したように、農業会議所のメンバーは基本的にテューリンゲン農村同盟の会員ないしは支持者でもあり、その経済顧問官もテューリンゲン農村同盟の会員である場合もあった。事実、ヴェーバ（Weber）なる経済顧問官は、村の講習の際に郡レベルの下部組織であるヴァイマル農民同盟の会員集会にも出席していた[19]。各村々では、このテューリンゲン農村同盟の会員である経済顧問官が、日常的に農民たちと講習や技術指導という形でつき合っていたのである。当時の農民の農業知識・農業技術の修得という面だけでなく、経済ならびに政治的な知識の修得、逆にいえば、テューリンゲン農村同盟による政治的イデオロギーの農民への移植という意味でも、この農業会議所に所属する経済顧問官の役割は重要であったと考えられる。

農業会議所の会頭や幹部会委員は、選挙によって選出されるが、基本的に、テューリンゲン農村同盟のリストによってのみ選出されており、当然組織的にも人的にも農業会議所は、テューリンゲン農村同盟と密接に関わっていた。シュタットローダ郡の場合、テューリンゲン農村同盟は自らの会員集会ならびに各農村での政治活動だけでなく、こうした農業会議所の経済顧問官の日常的な活動を通じて、その影響力を各農村において維持しかつ強化していたと考えられる。とりわけテューリンゲン農村同盟の会員ないしはその立場に近い経済顧問官が日常的に各村々を巡回することによって、非会員の農民にも直接テューリンゲン農村同盟の政策やイデオロギーを講習などの際に吹き込んだとも考えられる。ヴァイマル共和制末期のテューリンゲンの農民が、経済顧問官の報告書やテューリンゲン農村同盟の機関誌における投書欄を一瞥するとわかるように、驚くほどに、当時の政治・経済情勢について豊富な知識を持っていたのは、こうした経済顧問官の影響もあったといえよう。

このような農業会議所に所属する経済顧問官の農村における役割は、従来の研究では、全く言及されてこなかったが、農村社会ならびに農民におけるテューリンゲン農村同盟の影響を考える際、重要であったといえる。

以上のように、テューリンゲン農村同盟は、それ自身の活動とならんで、農業会議所や経済顧問官といった様々な人的ネットワークを通じて、農民への政治的・経済的影響力を行使しつつ、農民をその傘下に治めていたのである。

二　ナチスの農村進出と農民

従来のテューリンゲン農村同盟と農民との関係のあり方に大きな動揺を与えるようになったのが、一九二七／二八年にかけて勃発した農業恐慌であった。この農業恐慌の発生は、テューリンゲン農業にも影響を与え始め、地理的・地質的制約から酪農・畜産が主流であった農業経営に、一九二五年の関税自主権の回復とともになされた最恵国条約による「通商条約体制」の下、安価な外国産の酪農・畜産品の流入による国内産価格の暴落は、テューリンゲン農業にも打撃を与えることになった。当時の税務署の家計調査によると、中小農民の現金収入の約六割は、酪農・畜産関係からのものであり、価格暴落は、現金収入の大幅な減少を意味していた。[20] 当時のテューリンゲン農民は、現金収入の多くを、税金の支払いと肥料を買うために使っており、酪農・畜産品価格の下落による現金収入の減少は、税不払いによる強制執行ならびに肥料の不足という事態に陥ることになったのである。

それでは、テューリンゲン農村同盟と農民との関係のあり方に動揺を与えた農業恐慌下において、中小農民は実際にはいかなる状態にあったのだろうか。この問題は、興味深いテーマであるにもかかわらず、史料的な制約上、これまで、詳細なことはよくわからなかった。確かに農村外の観察者の側から垣間見た史料は存在するが、農村の内側からみた農民の日常生活は、殆どわからなかったといっても過言ではない。しかし、近年、オーラルヒストリーの成果もあって、

普通の農民が手記としても自らの経験を発表し始めている。そこで、ここでは、テューリンゲンの中規模農家のヴァイマル共和制末期における日常生活の一端を紹介することにしよう。

ここで紹介する人物は、一九二一年に八から一〇ヘクタール規模の中規模農家で生まれたヒルデガート・S（Hildegart S.）という女性である。ヴァイマル共和制末期は子供時代に相当するが、当時の農家の生活をイメージするには、彼女の回想は都合がよい。彼女の回想によると、家には二匹の馬車馬、三、四匹の乳牛、三匹の子牛、六匹の羊、六匹の豚そしてほかには鶏やがちょう、鴨さらにはウサギを飼っていたという。[21] 典型的なテューリンゲン農家に育ったといってよい。彼女は一九三三年以前の状況について次のように語っている。

「一九三三年以前といえば、子供として私はホントに良く覚えているのですが、それはもう私たち農民身分のものにとっては、心配の多い、つらい年月だったことを思い出します。私の両親は厳しい生存競争を生きていかなければなりませんでした。[22]」

彼女は、引き続き、農産物の価格について以下のように語っている。

「約一五〇キロの豚を売るために、私の父は肉屋を行ったり来たりしなければなりませんでした。それもたったの一〇〇マルクを得るためにですよ。同じように売れ行きが悪いものに、穀物がありました。アメリカがたくさんの農産物をドイツの市場に持ち込んだからなのです。[23]」

確かに、彼女の記憶でも農産物が売れず、価格が低いということが強調されており、しかもその理由が外国からの農産物のドイツへの流入にあるといった点は、従来の学説と一致する。さらに、当時の消費生活について彼女は次のように続けている。

「小麦粉、肉、牛乳、卵、果物は私たちの両親自身がまかなっていました。しかし、洋服や靴がしばしば事欠きました。比較的大きめの古着で私の服はできていました。私の母が自分で縫ったものです。一八六〇年生まれの祖父が靴を

作ってくれました。（……）私たちの農産物から得られるわずかな上がりは、まさに税金と肥料に当てられたのでした。[24]」

彼女の記憶では、ヴァイマル共和制末期の農家での日常生活は、確かに現金収入が不足し、税金と肥料のために必要な物は自分たちでまかなっていたようである。

こうした現金収入の不足と税負担に苦しむ農民の日常生活を背景に、一九二八年二月にテューリンゲンでも農民を中心とした三五〇〇〇人にも及ぶ一大デモンストレーションが勃発する。[25] このデモは、テューリンゲン農村同盟の大衆動員によって徹底的に組織された大集会であり、その目的は税務署の前で、税率の引き下げを求めるものであった。農民の不満は、テューリンゲン農村同盟指導部ならびにその政策にも向けられ始めていた。そこで、テューリンゲン農村同盟は、農業恐慌の下、税の負担に苦しむ農民の不満の矛先をかわすために、ルドルシュタット（Rudolstadt）の税務署前にて一大デモンストレーションを企画・組織し、税率引き下げを中心とした十二項目にわたる要請書を税務署長に手渡したのであった。[26]

このような状況下において、テューリンゲンではナチスが積極的に、農村部においてプロパガンダを展開し始めるのである。そもそも従来の学説では、ナチスが農民獲得のために専門部を組織して、全国規模で本格的に農村へ進出したのは、一九三〇年の秋以降、とされてきた。[27] しかし、ここテューリンゲンでは、事情は異なる。実はテューリンゲンでは、ナチスは、一九二七年九月にザウケルが大管区指導者に任命されて以降、都市部とならんで農村部においても積極的に政治活動を行っていたのである。

筆者が確認した限りにおいて、ナチスが農村においてテューリンゲン農村同盟を攻撃し始めるのは、一九二八年三月以降である。例えば、ナチスは次のようにしてテューリンゲン農村同盟を批判していた。

「賢明なドイツ農民は、農村同盟＝（ヴァイマル）農民同盟によるボス支配に長年飽き飽きしており、大ユダヤ銀行

と密接に結びついた、いわゆる農村同盟指導者を通じてよりも、ドーズ案による奴隷化に反対し、政治的に目標が明らかなヒトラー運動の意志を通じてのほうが、より良く彼ら農民の利益が代表されることを知っている。[28]」（括弧内筆者）

このようにテューリンゲンにおいては、既に一九二八年からナチスは積極的に農村部に進出し、農民獲得をめぐってテューリンゲン農村同盟と競合し始めるのである。しかし、既に述べたように、ナチスが専門部を創設して農民獲得を本格的にかつ組織的に展開し始めるのは、テューリンゲンにおいても一九三〇年秋以降である。農民の組織的な獲得のために、後のナチス農民指導者（Bauernführer）であるダレー（R. Walther Darré）は、農業政策機構（Agrarpolitischer Apparat）なる組織を創設し、各地にその担当者である農業専門顧問（Landwirtschaftlicher Fachberater）を配置し、既存の農業団体を外から攻撃するのではなく、「内側から征服する」という命令を農業専門顧問に打ち出す。彼はいう。

「私は、既存の農業組織をその内側から征服し、これらを組織的に経営細胞戦術といったやり方を通じて多かれ少なかれ、確実に手に入れることが依然として重要である、と考えている。[29]」

これ以降、この「内側から征服する」といったダレーの路線に従って、テューリンゲンでは、テューリンゲン農村同盟と農業会議所がその標的となるのである。

テューリンゲン農村同盟は、このダレーの路線にいち早く対応し、一九三一年三月には、テューリンゲン農村同盟の総会において、テューリンゲン農村同盟に対する忠誠義務をすべての会員に課し、これに反した場合、会員は除名されることになった。この時期のテューリンゲンの農業専門顧問は、一九〇八年生まれで、当時二三歳のルドルフ・ポイカート（Rudolf Peuckert）であった。彼は、元々青年農村同盟員であったが、一九三一年一月に「テューリンゲン農村同盟の指導者に対する誹謗と冒瀆によって」早速、除名されたのであった。[30]

ナチスは、一九三一年二月八日ヒトラーをはじめ全国の農業専門顧問が一同に会して開催されたヴァイマルでの農民

大集会（Große Bauernkundgebung in Weimar）以降[31]、ガウ・テューリンゲンの農業専門顧問ポイカートの指導の下、より組織的に農村においてアジテーションを行うことになるのだが、テューリンゲン農村同盟の農村における政治的秩序は、その進出によって、大きく動揺することになる。以下では、視点を農村という場に絞って、農村内部におけるナチスとテューリンゲン農村同盟との競合ならびに対立の模様を詳細に検討していくことにしよう。

一九三一年以降、農業政策機構をはじめとしたナチスの活発な農村でのプロパガンダによって、農村においてテューリンゲン農村同盟とナチスとの間でしばしば激しい衝突が生じていた。一九三一年六月二八日に起きた衝突は、当時大きな政治問題となったので紹介しよう。

同日、ヴァイマル近郊のフィッパッハエーデルハウゼン（Vippachedelhausen）村において、ナチスの集会が開かれた。そこには、ナチス支持者のほかにその村の住人も参加していた。そのなかにテューリンゲン農村同盟の支持者ないしは会員もいた模様である。ヴェヒトラー（Fritz Wächtler）なる元教師のナチ党幹部は、ヤーン（A. Jahn）という演説者を紹介する際、「テューリンゲン農村同盟の中央幹部会の元メンバー」と紹介した。実際は、シュライツ（Schleiz）という地域の元青年農村同盟員にすぎなかった。そこで、或る青年農村同盟員が次のようにヤジを放ったという。

「うそだ。」

それに対してヴェヒトラーは、「貴兄にそれに対する返答をしてあげよう」といった後、ナチスとテューリンゲン農村同盟支持者との間で衝突が生じた。その際、その青年同盟員は、ナチスに殴られ、近くにある川にたたき落とされたという。ナチスが彼を探して追い回す際、この青年農村同盟員は次のように叫んだという。

「ここは俺たちの土地だ。お前らは、ここでは何も捜すことなどできないはずだ。」

にもかかわらず、その集会場所の所有者の息子である彼は、殴打されたという。[32] この行為に対してテューリンゲン農

村同盟は激しく抗議し、これを「ラント平和の破壊」(Landesfriedensbruch) として州の内務大臣に以下のように正式に抗議したのである。

「我々は、この場を借りて大臣閣下にこの事件についてお知らせするとともに、このような事件が二度と繰り返されないような最も厳粛な処置をとられますよう、要求致します。我々は、監督官庁の不寛容な行動を期待します。といいますのも、そうした犯罪行為は、もう我慢すべきではないからであります。[33]」

その結果、同地区におけるナチスの集会は、州内務省によって禁止された。[34]「ラント平和」(Landesfrieden) すなわち農村内の「平和と秩序」を乱したナチスに対するその村ならびに村周辺の雰囲気は、極端に悪化したという。或る報告書は次のように伝えている。

「ヴェヒトラー代議士に対する不信感が、フィッパッハエーデルハウゼンならびに周辺において生じている。付言するならば、激しい党派的対立によって生じたのと同様、この不信感はおそらく広範に存在していることだろう。周辺の農村同盟員は、政治的理由から反ヴェヒトラーになっている。[35]」

テューリンゲン農村同盟の怒りは、農村同盟員が殴打されたということだけではなく、さらに重要なのは、自らの土地で、その土地所有者の息子が、殴打されたということであった。このことについて、テューリンゲン農村同盟は次のようにコメントしている。

「自らの土地でなされた我らが同胞の一人に対する許し難い蛮行によって、我々すべては、最も深い怒りと断固たる決意で満ちている。[36]」

そもそもテューリンゲン農村同盟のスローガンは、「自由なる農地に自由なる農民！」(Freie Bauern auf freier Scholle!)[37] であったが、自らの土地においては、自らが主人であり、他からのいかなる介入をも受けないという独立自営農民のメンタリティーを、ここからも垣間見ることができよう。

フィッパッハエーデルハウゼンにおけるナチスによるテューリンゲン農村同盟員に対する暴行は、「これまで、ナチ党とは精神的な武器で対決できるし、またせねばならない」[38]と考えていたテューリンゲン農村同盟に少なからぬショックを与えたのであった。

農村におけるナチスとテューリンゲン農村同盟との政治的主導権争いによって、次第にテューリンゲン農村同盟の農村における指導的な地位は動揺していき、幾つもの農村においてナチス支持の農民とテューリンゲン農村同盟支持の農民との間で反目ないしは対立が生じてきたようである。農村における両者の対立をさらに煽ったのが、一九三一年一一月に行われた農業会議所選挙であった。

三　テューリンゲン農業会議所選挙と農民

農業会議所選挙は、既に一九三一年の夏から、ダレーならびに農業専門顧問らによって、準備がなされていた。[39]テューリンゲンでは農業専門顧問ポイカートらによって、秋から積極的にその選挙戦の準備がなされていた模様である。[40]ナチスは、積極的に各農村において集会を開き、これまでの農業会議所の政策を批判した。ナチスの批判は、とりわけ、農業会議所が州からの財政援助と会員からの会費を受け取っているにもかかわらず、全会費額の半分が農業会議所のメンバーへの報酬として支払われていることに向けられた。[41]

これに対して、テューリンゲン農村同盟主催のアイゼンベルク（Eisenberg）ならびにヒルトブルクハウゼン（Hildburghausen）での集会において、テューリンゲン農村同盟議長で州政府代表兼州大臣のエルヴィン・バウム（Erwin Baum）は次のように訴えた。

「真のテューリンゲンの農民は、テューリンゲン農業会議所選挙ではナチスなど選ぶことはできない。というのは、

農民は農業会議所内に政治的なアジテーションを持ち込みたくはないからだ。農業会議所はテューリンゲンの州議会になってはならない。[42]」

このバウムの演説以降、テューリンゲン農村同盟は「党派的な口喧嘩ではなく、実用的な仕事を」というスローガンの下、[43]選挙戦を展開することになる。

その一方で、テューリンゲン農村同盟議長バウムのお膝元であるアイゼンベルクにおいて、ポイカート指導の下、ナチスのアイゼンベルク東支部主催の農民集会が開かれた。そこで、テューリンゲン農村同盟とナチスとの間で騒動が生じた。その模様についてアイゼンベルク市当局が報告書を書いており、以下ではそれを紹介することにしよう。

「演説者（ポイカート）は、まずバウム大臣閣下の演説について言及したが、その直後、様々な政治組織の支持者からなされたヤジによって中断した。ざっと見るに講堂には約五〇％が社会民主党と共産党支持者、約二五％がバウム大臣閣下系統の農民、そして二五％がナチス支持者であった。[44]」（括弧内筆者）

ナチスの集会の四分の三が政敵によって埋まっていたというのは注目に値する。さらに、四分の一がテューリンゲン農村同盟支持者であったというのも、興味深い数字である。こうしたケースは、当時の官憲の情勢報告書を見る限り、決して珍しくない。

さて、さらにこの報告書は、その後生じた騒ぎについて述べている。

「演説者は続けようとしたが、再三再四激しいヤジによって中断された。集会責任者の要望によって、共産党の支持者は警察によって講堂からつまみ出された。この際、嵐のようなヤジが起こった。（…）演説者が、『来年の春にテューリンゲンの樹木が花咲くことはもはやない。』という意味のことを述べた後で、憤激の嵐が全般的にわき起こった。グライツ（Greiz）出身のフォン・レーベン（von Löben）と称する人物は、椅子から立ち上がり、演説を中断させ、その場所から集会参加者に向かって語りかけた。彼は次のように語った。みんなは偉大なる政治的な助言を聞きにここまで

やってきたのではないだろう。そうではなく、農業会議所選挙について何か聞こうと思ってやってきたはずだ。」

これに対してポイカートは何かいろいろとしゃべったようであるが、報告書によるとヤジで殆ど彼の話は理解できなかったという。[45] この時期、テューリンゲンでも酪農・畜産品がさらに暴落しており、農民の経済的状況はさらに悪化していた。[46] このフォン・レーベンなる人物のように多くの農民は、農業会議所選挙には、政治的な話題よりも経済的困窮の解決を期待していたものと考えられる。

この農業会議所選挙は、議会選挙とは根本的に異なる点があった。それは、選挙権は地主経営者にしか付与されていないことである。[47] つまり、その家族や農業労働者ならびに奉公人や季節労働者には選挙権がなかったのである。それ故、この農業会議所選挙の結果は、農村の住民一般ではなく、まさに地主経営者たる農民の政治的動向を示すといえるのである。そこで、以下ではまずこの選挙結果について検討することにしよう。

そこで表1を見て頂きたい。実はテューリンゲンではナチスはアルテンブルク（Altenburg）郡とアルンシュタット（Arnstadt）郡を除いて大敗し、逆にテューリンゲン農村同盟が大勝しているのである。アルテンブルク郡は大土地所有者の農用地面積比が州内で最も高い地域で、逆にアルンシュタット郡は二ヘクタール以下の零細農民の農用地面積比が高い地域で、二つの郡とも中小農民の農用地面積比が相対的に低い地域であった。逆に中小農民の農用地面積比が高いシュタットローダ郡やアイゼナッハ（Eisenach）郡ではテューリンゲン農村同盟が圧倒的な強さを誇っていたことがわかる。

中小農民の農用地面積比が高い地域で、テューリンゲン農村同盟が高い得票率を占めていることは注目に値する。従来、農業会議所選挙でのナチスの大勝利は、ナチスの農村への進出ならびに農業組織への浸透の一つの結果とみなされてきたが、テューリンゲンではナチスは敗北しており、テューリンゲン農村同盟の農民への影響力はなおもこの時期維持されていたとみることができよう。しかし、確かに農業会議所選挙においてナチスは三六％の支持率を占めており、

表1　1931年11月29日における各郡別の農業会議所選挙の結果

郡	投票率	テューリンゲン農村同盟 (TLB)		ナチス	
Altenburg	88.2 [%]	43.7 [%]	2 [議席]	56.3 [%]	3 [議席]
Arnstadt	64.2	47.5	3	52.5	3
Camburg	82.5	59.7	3	40.3	2
Eisenach	53.8	83.7	8	16.3	1
Gera	82.2	70.7	6	29.3	2
Gotha	62.3	58.6	5	41.4	4
Greiz	78.6	66.8	4	33.2	1
Hildburghausen	69.0	58.7	5	41.3	4
Meiningen	60.0	58.0	5	42.0	3
Rudolstadt	64.2	65.8	4	30.6	1
Saalfeld	TLBのみ選挙リスト提出、よって選挙無し				
Schleiz	74.4	69.5	4	30.5	2
Sondershausen	63.1	45.6	4	48.9	4
Sonneberg	69.8	51.4	3	48.6	2
Stadtroda	72.4	80.4	8	19.6	1
Weimar	65.1	61.4	6	38.6	3
Thüringen	67.1	63.5	70	36.0	36
ヴァイマル中央農業会議所会員構成			35		9

出典：Dressel, Guido: Der Thüringer Landbund 1927-1933. Agrarische Interessenvertretung auf dem Weg ins Dritte Reich, Magisterarbeit, Jena 1996(MS), S.138; Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar (ThHStAW), NSDAP-Gauleitung Thüringen, Nr.1. Bl.162より作成。

ナチス支持の農民が少なからず存在したのも事実である。約三分の一の農民がナチス支持であったということは、単純平均して考えれば、各農村において投票者の約三分の一がナチス支持であったということになる。それでは、農村における農民のナチス支持とは一体いかなるものであったのであろうか。この問題について以下では考えていきたい。

農業会議所選挙においては、実は、選挙リストを郡役場に提出する際、百名以上の有権者たる地主経営者の署名が必要であった。シュタットローダ郡については、ナチスとテューリンゲン農村同盟双方の選挙リストとそれに賛同する農民の署名が、ヴァイマルの

表2　グニーブスドルフ村とローテンシュタイン村での郡農業会議所選挙の結果

	有権者総数	ナチス	TLB	無効
Gniebsdorf	11	4	5	-
Rothenstein	48	6	35	-

出典：ThHStAW, Thüringisches Kreisamt Stadtroda, Nr.157, Bll.132f.より作成。

テューリンゲン中央州立文書館に存在する。これらは従来誰も利用していないもので、今回初めて明らかにするものである。これらに依拠して作成した表が以下示すように、この史料群は非常に興味深い事実を我々に提示してくれる。

それではまず表2から見ていくことにしよう。表2は、署名を集めたナチス側の責任者ならびに副責任者の居住地における選挙結果である。署名をまとめる人物であるだけにシュタットローダ郡地域のナチ党内では、無視できない地位や影響力を誇っていたと想定できるが、結果は、表の通りである。署名責任者は彼の村では、有権者総数一一票中四票を得るにとどまり、副責任者に至っては、四八票中たったの六票しか獲得できていない。署名責任者たるものが、農村での集票という意味では、実はさして大きな影響力を持ち合わせていなかったことがわかる。

それでは次にナチスの候補者について見てみよう。表3がシュタットローダ郡における農業会議所選挙でのナチスの候補者リストである。このリストに掲載された候補者の居住地における選挙結果が表4である。これら候補者のなかでテューリンゲン農村同盟よりも多くの票を獲得したのは、クロスターラウシュニッツ（Klosterlauschnitz）村だけであり、それ以外は殆どがテューリンゲン農村同盟に負けているのである。ダレーは、村の有力者をつかむことによって村全体を掌握しようとしており、経営経済的に有力な農業経営者を選挙リストにのせるように指示を出していたというが、[48] この選挙結果を見る限り、基本的に選挙リストの候補者は、農村における集票という意味において、さして農村では影響力を持っていなかったといえる。

続いて、ナチスの候補者リストに署名した農民の居住地ならびにそこでの署名数と選挙結果

表 3　シュタットローダ郡における農業会議所選挙でのナチスの候補者リスト

名前	身分	居住地	年齢
1．Spindler, Paul	Landwirt	Gniebsdorf	59
2．Fiedler, Gerhard	Dipl.Landwirt u. Staatgutpächter	Droschka	32
3．Hörl, Hermann	Landwirt	Schorba	50
4．Jakob, Louis	Landwirt	Oelknitz	45
5．Böttcher, Arno	Landwirt	Buchheim	53
6．Schlegel, Wilhelm	Landwirt	Hermsdorf	46
7．Feuerstein, Albin	Landwirt	Milda	27
8．Mathes, Karl	Landwirt	Klosterlauschnitz	51
9．Plötner, Hugo	Landwirt	Weissenborn	40
10．Schütze, Robert	Landwirt	Rauda	56
11．Bratfisch, Felix	Landwirt	Albersdorf	44
12．Schorcht, Arthur	Landwirt u. Schmiedemeister	Milda	28

出典：ThHStAW, Thüringisches Kreisamt Stadtroda, Nr.157, Bl.16.

表 4　ナチス候補者の居住地における農業会議所選挙の結果

候補者の居住地	有権者総数	ナチス	TLB	無効
Gniebsdorf	11	4	5	-
Droschka	13	5	6	1
Schorba	18	7	9	-
Oelknitz	36	3	15	-
Buchheim	21	3	17	1
Hermsdorf	67	5	43	1
Milda	42	13	13	-
Klosterlauschnitz	25	14	7	-
Weissenborn	29	6	11	-
Rauda	17	6	9	1
Albersdorf	30	2	22	-

出典：ThHStAW, Thüringisches Kreisamt Stadtroda, Nr.157, Bll.132f.より作成。

表5　ナチスの候補者リストに署名した農民の居住地ならびにそこでの署名数と選挙結果

署名者の居住地	署名数	(無効)	有権者総数	ナチス	TLB	無効
Beulbar = Ilmsdorf	7	1	24	8	8	1
Klosterlauschnitz	22	7	25	14	7	-
Döllschütz	1	-	5	1	4	-
Petersberg	1	-	23	3	16	-
Tünschütz	2	-	15	2	12	-
Trockenborn mit Wolfersdorf	2	-	44	6	31	-
Bürgel	11	-	27	9	9	-
Buchheim	4	-	21	3	17	1
Königshofen	2	-	46	6	27	1
Rauda	6	-	17	6	9	1
Thalbürgel	20	6	22	9	12	-
Oelknitz	17	-	36	3	15	-
Rothenstein	13	-	48	6	35	-
Weissenborn	10	6	29	6	11	-
Tröbnitz	5	-	17	6	10	-
Ottendorf	16	-	29	12	12	-
Hellborn	3	-	22	6	15	1
Stadtroda	2	-	45	12	23	1
Renthendorf	11	-	57	17	16	-
Kleinbersdorf	10	-	22	3	16	-
Waltersdorf	9	1	20	1	13	-
Gniebsdorf	10	-	11	4	5	-
Poxdorf	5	-	15	5	5	-

出典：ThHStAW, Thüringisches Kreisamt Stadtroda, Nr.157, Bll.44-54 より作成。

を記したのが、表5である。ここから幾つかの非常に興味深い事実が明らかになってくる。まず、クロスターラウシュニッツ村を見てみよう。ここは、ナチスがテューリンゲン農村同盟を選挙結果において凌駕した農村であるが、実は二二筆の署名を得ながらも無効が七例もあった。署名した人物がその村の住人で選挙資格があるかどうか、村役場が点検することになっていたのだが、その結果、無効になったということは、名前や住所等に誤りなどがあったと考えられる。一例や二例の場合は、署名者の

ケアレスミスということも考えられるが、二二筆中無効が七例というのは、ケアレスミスにしてはあまりにも多すぎる。しかも、クロスターラウシュニッツ村の場合、無効を含めて署名総数二二のうち、実際にナチスが選挙で得た票数は一四票であり、少なくとも署名者の八名はナチスに実際には投票していなかったことになる。この場合、無効になった署名数と署名しながらナチスに実際には投票しなかったと想定される数とはほぼ一致するわけであり、署名で無効になった農民の多くがナチスには投票しなかったと考えるのが自然である。

同じことはタールビュルゲル（Thalbürgel）村においても指摘できる。この村の場合、有権者総数二二のうち、二〇名がナチスの選挙リストに賛同して署名したはずであるが、実際には九票しかナチスは得ておらず、署名した半数以上がナチスには投票せず、実はテューリンゲン農村同盟に投票していたことがわかる。そのなかには、署名で無効になった農民の票もまた多数含まれていたと考えられる。ヴァイセンボーン（Weissenborn）村の場合、一〇筆もの署名をナチスは得ながらも、実際の選挙ではナチスは六票しか得ておらず、しかも署名で無効が六例あり、この無効例の多くも実際にはナチスに投票しなかったと考えられる。以上のように無効署名数と署名しながらも実際にはナチスに投票しなかった数との間で相関関係が想定できるわけだが、とするならば、ナチスに投票するつもりのない彼らは、敢えて意図的にその候補者リストに対して無効となる署名を行っていたとみなすこともまた可能であろう。

さらに、エルクニッツ（Oelknitz）村の場合、ナチスは署名で一七筆を得ながらも、実際に選挙で得たのはわずか三票であり、少なくとも一四名は、ナチスの候補者リストに署名しながらも実際にはナチスに投票しなかったことになる。このようにナチスの候補者リストに一度は署名しながらも実際にはナチスに投票しなかった農民の存在を確認できる村として、クロスターラウシュニッツ、ビュルゲル（Bürgel）、ブフハイム（Buchheim）、タールブルゲル、ローテンシュタイン（Rothenstein）、ヴァイセンボーン、オッテンドルフ（Ottendorf）、クラインベルスドルフ（Kleinbersdorf）、ヴァルタースドルフ（Waltersdorf）、グニーブスドルフ（Gniebsdorf）の各村が挙げられる。ヴァルタースド

ルフ村では八筆もの署名を得ながら実際にナチスが得たのは、わずか一票であった。ここでとりわけ興味深いのは、グニーブスドルフ村である。この村は既に紹介したように、署名責任者の居住地である。そこでは、有効投票数一一のうち一〇筆もの署名を彼は集めていた。しかし、実際にナチスが得たのは四票であり、少なくとも六名はナチスには投票せず、その大半がテューリンゲン農村同盟に投票していたのである。

これらからいえることは、署名に一度は応じた農民の少なからぬ部分が、実際にはナチスに投票していなかったということである。その際、意図的に無効となる署名をした農民もいたと考えられる。ここから我々は、内心は拒否したいにもかかわらず、ナチスの署名の要求に嫌々応じている農民の姿や、ナチスには署名したくないが、署名を持ってきた同じ村人ないしは隣人には嫌な顔ができず、ついつい応じてしまった彼らの姿をイメージできるのではないだろうか。ナチスの署名に応じたという点だけを重視すれば親ナチス的ないしは、ナチス支持となるであろうが、実際には、無効となる署名をしていたり、ナチスには投票していなかったりしており、ここからも農民のナチス支持といったものが、決して一面的なものではなく、多面性を帯びていることが理解できよう。いうなれば、農民の二面性、すなわち或る面ではナチスに協力的でありながら、他の面ではナチスとは一線を画すという二面性をナチスのリストに署名した農民の少なからぬ部分については指摘できよう。こうした農民の「したたかさ」の背後には、農村内での日常的な人間関係を壊したくはない、農村内での不和を避けたいといった心理が働いたとも考えられる。さらには、党派的対立によって農村内の安寧・秩序を壊したくはない、といったドイツ農民戦争以来農民が主張する「ラント平和」の維持といった村の論理があったのではないかとも考えられる。この問題については後ほど扱うことにしよう。

さて、これまではナチス側の署名を中心に見てきたのであるが、以下ではテューリンゲン農村同盟側の署名について見てみよう。表6がシュタットローダ郡における農業会議所選挙に際してのテューリンゲン農村同盟の候補者リストである。そして表7が候補者の居住地における選挙結果である。ここから一目で、テューリンゲン農村同盟が圧倒的にナ

表6　シュタットローダ郡における農業会議所選挙での テューリンゲン農村同盟の候補者リスト

Artur Röder	Landwirt	Grossschwabhausen
Paul Merker	Landwirt	Grossbockedra
Max Polz	Landwirt u. Ziegeleibesitzer	Oberbodnitz
Emil Herrmann	Landwirt	Königshofen
Hermann Schmidt	Landwirt	Rutha
Rudolf Bauch	Staatsgutspächter	Schöngleina
Paul Kolditz	Landwirt	Grossentersdorf
Albert Serfling	Landwirt	Hermsdorf
Max Scheibe	Landwirt	Gniebsdorf
Walter Joh	Landwirt	St.Gangloff
Gustav Gundermann	Landwirt	Röttelmisch
Alfred Hackenburg	Landwirt	Rothenstein
Arno Schmidt	Landwirt	Weissbach, Rothvorwerk
Alfred Prissig	Landwirt	Schöps
Bruno Burkhardt	Landwirt	Pretschwitz
Otto Verkäufer	Landwirt	Zimmern
Paul Krumbholz	Landwirt	Hohendorf
Paul Hünniger	Landwirt u. Bürgermeister	Bucha

出典：ThHStAW, Thüringisches Kreisamt Stadtroda, Nr.157, Bll.110f.

チスを凌駕していたことがわかる。さらには、グロースボッケドラ（Grossbockedra）、ケーニッヒスホーフェン（Königshofen）、ヘルムスドルフ（Hermsdorf）村以外の農村では、ナチスに投票した農民が全くいなかったということである。選挙リストにあがった人物が、村での集票という観点からいうならば、その居住地である農村内において圧倒的な影響力を保持していたことがわかる。その農村の農民が基本的にそのリストにあがった自分たちの村出身者を村あげて支持していたことがわかる。このことは、逆にテューリンゲン農村同盟は、農業会議所選挙において、その農村で支持を得ている有力な農民を候補者に選んだともいえるわけであり、従来農業会議所の各郡のメンバーにはそういった村の顔役がなっていたとも想定できる。テューリンゲン農村同盟の各候補者は自分たちの農村での基礎票をしっかりと固めており、こうした農村では基本的にナチス支持は例外的であったことがわかる。

表 7　テューリンゲン農村同盟の候補者の居住地における農業会議所選挙の結果

候補者の居住地	総数	無効票	TLB	ナチス
Grossschwabhausen	41	2	26	-
Grossbockedra	34	8	23	1
Oberbodnitz	20	4	12	-
Königshofen	46	6	27	1
Rutha	15	-	14	-
Schöngleina	34	7	15	-
Grossentersdorf	37	1	23	-
Hermsdorf	67	5	43	1
Gniebsdorf	11	4	5	-
St.Gangloff	41	11	21	-
Röttelmisch	22	7	10	-
Rothenstein	48	6	35	-
Weissbach, Rothvorwerk	24	3	15	-
Schöps	17	1	9	-
Pretschwitz	8	-	8	-
Zimmern	29	2	19	-
Hohendorf	9	1	7	-
Bucha	54	1	34	-

出典：ThHStAW, Thüringisches Kreisamt Stadtroda, Nr.157, Bll.44-54 より作成。

表 8　ルドルシュタット郡のズンドレムダ村ならびにキルヒハーゼル村におけるナチスとテューリンゲン農村同盟による署名数と選挙結果

	署名数		選挙結果		
	ナチス	TLB	有権者総数	ナチス	TLB
Sundremda	13［無効 2］	14［無効 2］	32	14	15
Kirchhasel	14［無効 2］	29［無効 2］	53	20	28

出典：Thüringisches Staatsarchiv Rudolstadt, Thüringisches Kreisamt Rudolstadt, Nr.43 より作成。

こうして見てくると、ナチスが候補者を出したような農村では、農村内部においてナチス支持とテューリンゲン農村同盟支持との二つの陣営に明確に分かれていたことが判明するが、テューリンゲン農村同盟が候補者を出したような農村では依然としてテューリンゲン農村同盟が農村における政治的主導権を維持しており、ナチスが介入する余地はこの時期にはまだなかったことがわかる。

ナチスの農村進出によって、ナチスとテューリンゲン農村同盟との勢力が伯仲した農村も少なからず出現してくるが、そういうところでは、後に問題にする農民間の反目や対立が生じていたようである。その二つの政治勢力の狭間に立った農民もいたであろう。そこで興味深いのが表8である。ルドルシュタット郡のズンドレムダ（Sundremda）村とキルヒハーゼル（Kirchhasel）村では、実はナチスとテューリンゲン農村同盟双方によって署名活動が行われたところである。ということは、これらの村はナチスとテューリンゲン農村同盟とが農民の支持を奪いあった農村だったといえる。その村の農民は、ナチス支持かテューリンゲン農村同盟支持か、いずれにせよ態度決定を迫られることになる。その結果が表8であるが、ズンドレムダ村ではナチスが有権者総数三二人中一三筆の署名を獲得し、テューリンゲン農村同盟は一四筆獲得した。ほぼこの村における両者の勢力はほぼ伯仲しており、選挙結果も基本的に署名者がほぼその支持どおり投票したと考えられる。キルヒハーゼル村ではナチスがやや劣性ではあるが、両者が激しく主導権争いをしている様子が想定できる。この二つの村では両者の勢力が基本的に拮抗していたといえる。

そうしたなか、ここで挙げた「無効2」と記した事例は誠に興味深い。というのは、この二名の農民は実はナチスにもまたテューリンゲン農村同盟にも署名していたのである。これまでにナチスにもテューリンゲン農村同盟にも署名した事例はテューリンゲン州において現段階では筆者は、四例しか知らないが、この事例こそ、両者の農村内での勢力争いの狭間に立ち、どちらにもとりあえずは良い顔をしておくために署名した農民の姿を示すものではないだろうか。そのなかでキルヒハーゼル村の農民ミルダー・ヴィンツァー（Milder Winzer）なる人物は、さすがに両方に署名するこ

とに罪悪感を感じたのか、ナチスの署名にはいわゆるラテン筆記体で署名に応じ、テューリンゲン農村同盟の署名にはドイツ筆記体で署名を行っていたのである。

既に述べたように、こうした農民たちの多面的な行為の裏には、農村内でのこれまでの人間関係を壊したくはないといった心情が、少なからず働いていたと考えられる。キルヒハーゼル村のヴィンツァーのような二つの署名に応じた農民の場合も、農村内でナチスとテューリンゲン農村同盟とが農民の獲得をめぐって争っており、こうした対立に巻き込まれたくはないといった心情も想定できるのではなかろうか。実際、テューリンゲンでは、この村のようにナチスとテューリンゲン農村同盟との主導権争いによって、農民がまっぷたつに分かれて、お互いに反目し対立し合っている農村が、問題視されてくるのである。そこで以下では、農民がナチスとテューリンゲン農村同盟との二つに分かれて対立している村の様子について検討してみることにしよう。

四　農民間の「私闘」（フェーデ）と農村内の「平和」

ナチスの農村進出を考える際、ヴァイマル共和制末期においては、農村を以下の三つに類型化できよう。まず第一が、ナチスが主導権を握った農村、第二が、ナチスとテューリンゲン農村同盟とが主導権争いを繰り広げ、両者の勢力が均衡している農村、第三が、テューリンゲン農村同盟が主導権を依然として把握し、ナチスの介入の余地が乏しい農村。ヒトラーの権力掌握の時期が近づくにつれて、当然のことながら、第三として類型化した農村は減り、第二として類型化した農村に移行するわけであるが、さらに時間が経過するにつれて、第二として類型化した農村は第一として類型化した農村へとさらに移行する、と考えられる。ここではとりわけ第二として類型化した農村を取り上げることにしよう。なぜならば、一九三二年以降、比較的多くの農村がこの第二のカテゴリーに分類でき、しかもこのカテゴリーに入る農

村の状況こそ、ナチスやテューリンゲン農村同盟が当時問題視しかつ危惧していたものであり、そこで生じた農村内の紛争解決を絶えず望み、しかもそれを頻繁に訴えていたからである。

一九三二年春の大統領選挙戦以降、ナチスのテューリンゲン農村同盟への浸透ならびに農村への進出が一段と高まったのは事実である。とりわけ、ナチス側によってテューリンゲン農村同盟からの脱会キャンペーンなるものがそう起され、その結果、テューリンゲン農村同盟からの組織的な脱会が相次ぎ、その結果テューリンゲン農村同盟は資金難に苦しむほどであった。[49] さらにナチスの農村進出に際して、ポイカート指導下の農業政策機構とならんでこの時期重要な役割を演じたのが、牧師と教師であった。牧師のなかでも特に「ドイツ的キリスト者」(Die Deutschen Christen) と呼ばれるナチス支持のプロテスタント系の牧師たちが主役を演じていた。[50] 彼らは説教を兼ねて、積極的に農村においてナチスのプロパガンダを行っていた。そこで中心的な役割を担った牧師の一人であるレフラー (Siegfried Leffler) なる人物は、ヴァイマルで開かれたナチスの支部の集会で約三〇〇人を前に次のように語っている。「ルターは、健全な理想を持ち、そしてそれを実行する、そう、まさにアードルフ・ヒトラーのような人物であったのだ。[51]」彼らが、まさにヒトラーをルターに比しながら、ナチスのプロパガンダを行っていたことは、ナチスとプロテスタント系の農民との関係を考える上でも重要である。

このような牧師を使ったナチスのプロパガンダに対して、テューリンゲン農村同盟は、農民集会におけるバウムの以下のようなコメントを機関誌上において発表した。

「牧師個人が政治的に完全なる自由をもつのは当然であるにしても、牧師は政党のアジテーターになりさがるべきではない。(…) 牧師は教会内では平和を説くべきであって、政治的憎しみを助長すべきではない。[52]」

ナチスの農村進出に際して、牧師とならんで重要な役割を担っていたのが、教師であった。そもそも農村内における教師の役割は、テューリンゲン農村同盟の注目するところではあった。既にテューリンゲン農村同盟は、ナチスの農村

進出が組織的に本格化する前の段階で、以下のような支部からの報告を機関誌上において公表している。

「我々は、なぜテューリンゲン農村同盟が我が村にいるたくさんの教師たちの、党利党略的な活動に関わる態度に対して、何ら措置をこうじなかったのか、不思議でならない。教師が自分が正しいと思う政治的意見をもつのは当然のことだ。しかし、忠実な農村同盟員で、歳食った我々農民には、教師がとくにナチスのために行うその宣伝のやり方が、だんだんと悩みの種になってきている。（……）我々のところでは、たくさんの教師たちが今ではいつも居酒屋(Gastwirtschaft) に入り浸って、ナチスのためにアジテーションを行っている。学校に通っている生徒を子供に持つ農民がいるが、彼らは、子供たちの身に何も起こらないように、教師のご機嫌をとるためにもナチスびいきであらねばならないと考えている。いずれにせよ、そうした向こう見ずなナチの教師らを通じて平和と民族共同体が我が村にもたらされるようなことはないのだ。[53]」

農村におけるナチス支持の教師によるアジテーションは、一九三二年には、さらに活発になったようである。この時期、こうした状況に対してテューリンゲン農村同盟議長のバウムは、五月に開かれた農民集会において以下のように訴えた。

「政治は学校に属してはいない。今日、自分たちの究極の任務が政治的な憎しみを子供の精神に吹き込み、さらには政治を学校での一番の科目にせねばならないと考える一連の教師が、国民学校に、さらに多くはより上級の学校にいる。こうした教師に対して、我々は最も激しい抵抗を組織して、こういうあくどいことを強制的にさせないようにしよう。[54]」

「政治的な憎しみ」という言葉からも農村内部でのナチスとテューリンゲン農村同盟との対立の激しさが窺えるが、このような農村内部の対立に対して、バウムはさらに次のような訴えかけを農民集会で行っていた。

「村ばかりでなく、いやそればかりか、家族をも引き裂いてしまいかねない争いごとが、教会と学校の側からなされている時、一体、村の平和（der dörfliche Friede）はどこにいってしまうのだろうか。村の平和（Friede im Dorf）は

何が何でも維持されねばならない。[55]」

バウムは、農村内におけるナチスとテューリンゲン農村同盟との対立による農村の亀裂に際して、農民集会で「村の平和」の維持を訴えていたのである。

一九三二年七月での選挙戦に際しても、テューリンゲン農村同盟は機関誌上において「我々は農村での平和(Frieden auf dem Lande)を欲す[56]」と訴えかけていた。農村内における両陣営による対立はナチス側も危惧するところであり、ポイカートは後年、両陣営の対立を「二つの農民戦線」(zwei Bauernfronten)と呼び、さらにこの「二つの農民戦線」による対立を「最も激しい私闘(フェーデ[Fehde])」と呼んでいた。[57]一方、農村内における農民同士の「私闘」(フェーデ)を解決するために、テューリンゲン農村同盟は、機関誌上において常に「あらゆる住民との協力」とか「ドイツの村落共同体」というスローガンを強調していたのであった。そこで、テューリンゲン農村同盟は、秋の収穫感謝祭を前にして、以下のように農民たちに訴えかけた。

「我々は安らぎを望む。我々の祭りのためにも。(…)至るところで開かれている収穫感謝祭は、ここにおいて、あらゆる住民サークルと村の精神的教育者が協力することによって、以前あった活気を実際にもたらすという最高の機会を我々に与えてくれるのだ。我々の祭での目標もまた、常に、ドイツ的村落共同体である。[58]」

収穫感謝祭を利用することによって、農村内の対立を止揚しようと試みなければならないほど、この時期の農村内の対立は深刻であったのであろう。両陣営による農村内の対立を、ポイカートは、さらに次のように回顧している。

「(…)ナチスと政治的農村同盟との闘争は、我々の場合、つい最近までテューリンゲンにおいて激しくなされた。村の平和(Friede der Dörfer)は、この闘争によって破壊され、農民は農民をもはや理解できないほどであった。いや、それどころか、家族はバラバラに引き裂かれていたのである。こうしたこころの溝は修復不可能のように思われた。[59]」

このような農民間の「私闘」(フェーデ)が農村内部で繰り広げられるなか、一九三三年一月にヒトラーが政権を掌

握した。さらには、三月における国会選挙でのナチスの圧勝ならびに全権委任法の可決によって、社会全般にわたってナチスによる強制的同質化（Gleichschaltung）が進むとともに自発的な同調も進んでいった。こうした流れのなかに、テューリンゲン農村同盟もまたのみ込まれることになる。

一九三三年四月にナチスの条件を全面的にのむ形でテューリンゲン農村同盟の州議会議員団はナチスに吸収され、テューリンゲン農村同盟の組織自体も新たな組織であるナチスの全国食糧身分団（Reichsnährstand）の下部組織であるラント農民団（Landesbauernschaften）に組み込まれることになった。こうして長年にわたるテューリンゲン農村同盟とナチスとの対立は、組織間だけでなく、農民間でも解消されるはずであった。[60]

しかし、テューリンゲン農村同盟が一方的にナチスに屈服したことに対して、下部のテューリンゲン農村同盟の一般会員である農民らは承伏しなかったようである。従来のテューリンゲン農村同盟指導部ならびに郡農村同盟指導部の指導的ポストにナチ党員が就任することに対して、各地域の一般の農民会員は激しく反発していたのである。ここでは、その反発の模様をカムブルク（Camburg）郡という中小農民の勢力が強かった地域を例に紹介しよう。[61]

一九三三年六月二日にカムブルク郡農村同盟の緊急総会が開かれ、そこにおいて次期幹部会の役員選出が討議された。この幹部会の主要なポストには、ナチ党員が占めることになっていた。現指導部が提出したナチス優位の幹部会役員リスト[62]に対して多くの一般会員が反発するのである。それではその模様を議事録で再現しよう。

「（幹部会役員リストが掲げられた後）そこで、彼（ツヴァイクラー博士［Dr.Oskar Zweigler］＊ナチ党員の次期議長）が幹部会をこうした形で承認するように提案した。ロダモイシェル（Rodameuschel）出身のローゼンハーン（Rosenhahn）氏は（リストに記載された）人物の順序を全く逆にすることを提案し、秘密投票を行うことを要求した。秘密投票に関する最後の動議について総会は採択を行った。賛成が三八で、反対が二二であった。しかし、先に上で掲げた形での（指導部の）提案が残っているので、州政府委員のマッケルダイ（Erich W. Mackelday＊前テューリンゲ

ン農村同盟事務長）氏は、（秘密投票で）採択することに対して警告を発した。これに対して、自分の出した動議（秘密投票）に固執するローゼンハーン氏が反駁した。そしてケッケニッチュ（Köckenitzsch）出身のシュピンドラー（Spindler）氏はかなり強い調子で政府委員のマッケルダイ氏を攻撃した。

（指導部の）提案に賛成か否かといった争いにトイエルン（Teuern）出身のエックシュタイン（Herbert Eckstein＊前テューリンゲン農村同盟第二議長）氏とマッケルダイ氏、さらにはヴァイマルのヴィンマー（Wimmer）氏が加わった。マッケルダイ氏はシュピンドラー氏に謝罪を求めた。シュピンドラー氏は求められたように謝罪し、多くの人物とともにホールを後にした。ウーテンバッハ（Utenbach）出身のプーシェンドルフ（Arno Puschendorf＊現カムブルク郡農村同盟議長）氏が出席者に（指導部の）提案を受け入れて、秘密投票は破棄するように懇願した。彼は二つの動議（秘密投票と役員リスト）を一つに結びつけた。もう一度採決がなされた。提案に三三人が賛成、二人が反対、五人が棄権した。ローゼンハーン氏はこの選出に反対して抗議した。[63]」（括弧内筆者）

ナチス主導の幹部会構成である役員リストが、秘密投票で否決されることを恐れたカムブルク郡農村同盟の指導部ならびにテューリンゲン農村同盟指導部は、秘密投票ではなく、公開投票を要求しており、彼らとそれに反発する一般会員との対立が垣間見られる。郡農村同盟の緊急総会にテューリンゲン農村同盟幹部がじきじきに参加し、郡農村同盟幹部とともに一般会員の抵抗を抑えつけようとしているのは興味深い。当初参加者は、六〇人であったが、結局指導部案の幹部会役員リストに賛成したのは、三三人で、シュピンドラーとともに退出したのは、二〇人になる。テューリンゲン農村同盟の地域支部におけるナチスに同調する農民とそれに反発する農民との対立が、以上の叙述からも窺えよう。

テューリンゲン農村同盟がナチスによって「占領」されたことに対して、多くの会員が脱会したり、会費を滞納するものが続出した。その改善策が何度も機関誌上において講じられていた。[64] また、その後も農村において前テューリンゲン農村同盟派の農民とナチス派の農民との側で相変わらず対立や紛争が生じていたようである。その結果、ポイカート

は頻繁に「ドイツ農民の一致団結」を訴えかけていたのである。[65] ナチスに屈服したテューリンゲン農村同盟の元幹部も、或る農民集会で「党派的な争いが打ち壊したすべてを忘れ、共通の仕事のために協力しあうように農民に切に要求した」[66]ほどであった。そしてついに一九三三年の八月に、ポイカートは「ラント農民指導者命令」という形で、次のような命令を布告した。

「（……）私はこの場を借りてすべての下級機関に以下のことを要求する。諸々の団体に属していた元指導者や元会員に対するあらゆる個人的な闘争をやめること。（…）農民のお互いの闘争は今や完全に終わりにしなければならない。[67]」

ラント農民指導者の名前で命令を出さねばならないほど、農民間の「私闘」（フェーデ）は、この時期においてもなお続いていたと指摘できよう。そうしたなか、ナチスは、一九三三年一〇月一日にハーメルン（Hameln）郊外のビュッケベルク（Bückeberg）において収穫大感謝祭を開催した。[68] これと同時並行的にテューリンゲンの各農村においても収穫感謝祭が村をあげて盛大に開催された。この収穫感謝祭には村の子どもまでもが動員された模様である。その模様について当時小学生だった女性は次のように回顧している。

「一九三三年一〇月一日ハーメルン郊外のビュッケベルクにおいて収穫大感謝祭が開かれました。村においても収穫感謝祭が祝われました。我々生徒たちは、エーレンシュトロイセ（Ährensträuße）村での行進に、穀物で飾り付けされた手押し車を引いて参加しました。若い女性たちは、紅いスカートや黒いビロードのコルセットさらには白いブラウスを身につけて、収穫感謝祭のための花冠のもとで、お祭り広場で踊りました。[69]」

ナチス主導による全国一斉の収穫感謝祭が、テューリンゲンの各農村においても村をあげて行われた後の一九三三年一〇月下旬にポイカートは、ヴァイマルのダレーハウスのこけら落としに際して、以下のような呼びかけをテューリンゲンの農民たちに行った。

「最も激しい私闘（フェーデ）状態でお互い対立していたテューリンゲンの農民は、今日、一つにまとまった。我ら

のテューリンゲン農村における平和が確保された。（……）今や一つにまとまったテューリンゲン農民は、二度と再び引き裂かれてはならない。二度と再び我らのテューリンゲン農村の平和がかき乱されるようなことがあってはならないし、新たな争いが生じてはならないのだ。[70]」（括弧内筆者）

もちろん、ナチス主導による全国一斉の収穫感謝祭の開催とそれへの村人の動員によって、従来のテューリンゲン農村同盟側とナチス側とに分かれていた農民間の「私闘」（フェーデ）が、ポイカートがいうように、解消されて、いきなりテューリンゲンの農民が再び一つにまとまり、農村の平和が確保された、とは考えにくい。恐らくは農民間の対立・反目は、依然としてその後も続いていたであろう。しかし、この収穫大感謝祭を契機として、従来のような農村内の党派的な対立が、「私闘」（フェーデ）といわれるほど深刻ではなくなり、ポイカートらにとっては、もはや以前ほど重要な争点として問題視されなくなったことだけは指摘できよう。事実、ナチズム体制が確立していくにつれて、従来の農民間の党派的な対立は、彼らによって殆ど話題にされなくなるのである。むしろこれ以降彼らにとって問題となるのは、党派的な対立ではなく、まさにナチ党内部での権力争いなのであった。[71]

結

以上、本稿ではヴァイマル共和制末期におけるナチスの農村進出に対するテューリンゲン農民の反応について考察してきた。従来、テューリンゲン農村同盟は、農業会議所やそれに所属する経済顧問官を通じての、日常的な農業技術指導ならびに農業経営上の相談などによって、農民に対する影響力を維持・強化し、その農村支配を保持してきた。これに対抗してナチスは自らの政党組織である農業政策機構だけでなく、村の教師や牧師を通じて農村に浸透していった。

しかし、ヴァイマル共和制末期の農村は、決してナチス一色に染まっていたわけではない。そこでは、ナチスの農村

への進出によって、従来農村を政治的だけでなく、経済的・社会的にも支配していたテューリンゲン農村同盟とナチスとの間で熾烈な主導権争いが繰り広げられており、その結果、農村内では農民間の「私闘」（フェーデ）といわれる党派的な対立さえ生じていたほどであった。しかも当時の農村内では農民間の「私闘」（フェーデ）によって、「村の平和」がかき乱されており、当時の農業界の指導者らによって問題視かつ危惧されていたほどであった。

本稿の主たる目的は、研究史上ナチスが大躍進したといわれてきた中小農民主体のプロテスタントの農村部における農村の実体を、ここでは具体的に中部ドイツのテューリンゲンを取り上げることによって、ミクロに、しかもできるだけ史料に基づいて検討することにあった。以上を通して、ナチスが農村に進出するに際して、従来イメージされたほどには、実際には、農村全体がすんなりとナチス一色に染まったわけでも、農民が受動的にしかも無抵抗にナチスを受け入れたわけでもなく、少なからぬ農民がナチスの農村進出に対して反発していた様子が明らかになったことであろう。

「農民のナチ化」という問題にしても、農業会議所選挙におけるナチスの候補者リストへの署名という点では、確かにナチス支持、すなわち「ナチ化した」とみなされる農民も、決して一方的にナチスを支持し、投票していたわけではない。署名に一度は応じながらも、実際には無効になる署名を行ったり、実際の選挙ではナチスには投票しなかった農民もまた存在していたのである。そこには、表向き親ナチス的でありながらも、しかしその裏ではナチスとは一線を画すという農民の二面性があり、「農民のナチ化」を考える際、この農民の二面性に今後いっそう着目する必要があるといえよう。こうした農民たちの「したたかさ」の背後には、党派的な対立によって「村の平和」をかき乱したくはないという、いわば「村の平和」の確保という伝統的な村の秩序観もまた存在していたと考えられる。

以上が、従来北ドイツとならんで農村部でのナチ化が成功したとみなされてきた中部ドイツのプロテスタント地域における農民の一相貌である。

これまでヴェストファーレン（Westfalen）や南ドイツをはじめとしたカトリックの農村地域におけるナチスの農村

進出に対する農民の反発のみが強調され、それに対するプロテスタントの農村地域での農民の反発やそれによる農民間の対立は、まったくもって等閑視されてきた。本稿は、そのことに対する一つの異議申し立てにすぎない。しかし、ここでの一つの異議申し立てが、今後、農民をカトリック地域とプロテスタント地域の二つに分け、前者が相対的にナチスへの免疫性を持ち、後者が相対的にナチスを支持した、という単純なミリュー概念に基づくステレオタイプ的なイメージに対する多種多様な異議申し立てを喚起することを願いつつ、筆を置くことにしよう。

＊本稿を、一九九九年一一月一七日未明、修士論文作成中に急逝した元九州大学大学院生河野義之君の霊前に捧げる。

（1）　なお、本稿は、筆者が一九九八年九月に日本学術振興会に提出した『（平成八年度）海外特別研究員最終報告書』所収の、Kumano, Naoki: Der Thüringer Landbund in der Endphase der Weimarer Republik. Unter besonderer Berücksichtigung seines Verhältnisses zur NSDAP, zum Reichs-Landbund und zur Christlichnationalen Bauern-und Landvolkpartei (Maschienenschrift: 178 Seiten＋XXVII) に基づき、その一部を加筆・訂正し、訳出したものである。

（2）　拙稿「ヴァイマル共和制末期における地方の農民団体とナチス―テューリンゲン州を中心に―」『法政研究』（九州大学法政学会）第六六巻第三号（一九九九年）、八九―一二六頁。

（3）　Protokoll über die Sitzung des Völkischen Führerringes Thüringen, in: Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar (künftig: ThHStAW), Gau-NSDAP, Nr.1, Bl.13; vgl. abgedruckt in Hitler. Reden, Schriften, Anordnungen. Februar 1925 bis Januar 1933, Bd.II: Vom Weimarer Parteitag bis zur Reichstagswahl. Teil I: Juli 1926-Juli 1927, hrsg. und kommentiert von Bärbel Dusik, München/London/New York/Paris 1992, S.77; Heiden, Detlev/Gunther Mai (Hg.): Thüringen auf dem Weg ins »Dritte Reich«, Erfurt o.J., Dok.Nr.10, S.205.

（4）　Dressel, Guido: Der Thüringer Landbund 1927-1933. Agrarische Interessenvertretung auf dem Weg ins Dritte Reich (künftig: TLB), Magisterarbeit, Jena 1996 (MS).

(5) Pyta, Wolfram: Dorfgemeinschaft und Parteipolitik 1918-1933. Die Verschränkung von Milieu und Parteien in den protestantischen Landgebieten Deutschlands in der Weimarer Republik (künftig: Dorfgemeinschaft), Düsseldorf 1996.

(6) Dornheim, Andreas: Landwirtschaft und nationalsozialistische Agrarpolitik in Thüringen (künftig: Landwirtschaft), in: Dornheim, Andreas/Bernhard Post/Burkhard Stenzel: Thüringen 1933-1945. Aspekte nationalsozialistischer Herrschaft, Erfurt 1997, S.113-149.

(7) 足立芳宏『近代ドイツの農村社会と農業労働者―〈土着〉と〈他所者〉のあいだ―』京都大学学術出版会、一九九七年。

(8) Merkenich, Stephanie: Grüne Front gegen Weimar. Reichs-Landbund und agrarischer Lobbyismus 1918-1933, Düsseldorf 1998.

(9) 伊集院立「ドイツ農村の変容とナチス―ポメルンにおけるナチスの農村労働者政策―」『社会労働研究』（法政大学社会学部学会）第四四巻第三・四号（一九九八年）、一―七八頁。

(10) Gies, Horst: NSDAP und landwirtschaftliche Organisationen in der Endphase der Weimarer Republik (künftig: NSDAP), in: Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte (künftig: VfZG), S.341-376; Ders.: Landbevölkerung und Nationalsozialismus. Der Weg in den Reichsnährstand, in: Zeitgeschichte, Jg.13 (1986), S.123-141; Ders.: Die nationalsozialistische Machtergreifung auf dem agrarpolitischen Sektor, in: Zeitschrift für Agrargeschichte und Agrarsoziologie, Jg.16 (1968), S.210-232; Farquharson, J.E.: The Plough and the Swastika. The NSDAP and Agriculture in Germany 1928-45 (künftig: The Plough), London and Beverly Hills 1976.

(11) 豊永泰子『ドイツ農村におけるナチズムへの道』ミネルヴァ書房、一九九四年。

(12) 以上の叙述は、拙稿、前掲「ヴァイマル共和制末期における地方の農民団体とナチス」九八―九九頁による。

(13) Rundschreiben 3 [1927]. Landesverband Thüringen an die Bezirkgruppen, in: Thüringisches Staatsarchiv Altenburg, Deutschnationale Volkspartei, Nr.48.

(14) Letzte Gelegenheit, wieder Mitglied zu werden !, in: Der Thüringer Landbund (künftig: TLB), Nr.24 v.24.3.1928, S.3; Aus dem Thüringer Landbund. Weimarischer Bauernbund, in: TLB, Nr.25 v.28.3.1928, S.3.

(15) Aus dem Thüringer Landbund. Weimarischer Bauernbund. Vermeidet Viehkauf bei Nichtmitgliedern !, in: TLB, Nr. 26 v.31.3.1928, S.3.

(16) Die Thüringische Landwirtschaft. Erzeugungsgrundlagen, Ackerbau-und Viehwirtschaft in Bild, Wort und Zahl nebst statistischen Teil: Bodennutzung u.Viehhaltung in den Gemeinden, Saatenstandsbezirken und Kreisen, mit über 80 Karten u.

Zeichnungen, hrsg. von Dr.W. Wilmanns, unter Mitwirkung von Dr. R. Gärtner/Dr.E.Klapp, Jena 1933, S.XXXXVIII.

(17) ThHStAW, Thüringisches Kreisamt Stadtroda, Nr.775.

(18) Monatsbericht für März 1930. Bezirk Eisenberg, in: ThHStAW, Thüringisches Kreisamt Stadtroda, Nr.775.

(19) Monatsbericht für Januar 1931. Jena, Weber, in: ThHStAW, Thüringisches Kreisamt Stadtroda, Nr.775.

(20) 以上の叙述は、拙稿、前掲「ヴァイマル共和制末期における地方の農民団体とナチス」九九頁による。

(21) Aber was half es. Hildegart S., geb. 1920, in: Braune, Gudrun(Hg.): Quellen zur Geschichte Thüringens. Erinnerungen an die Zeit zwischen 1930 bis 1947 (künftig: Erinnerungen), Erfurt 1996, S.71.

(22) Ebenda.

(23) Ebenda.

(24) Ebenda, S.71f.

(25) Notkundgebung in Rudolstadt, in: TLB, Nr.10 v.4.2.1928, S.1.

(26) 以上の叙述は、拙稿、前掲「ヴァイマル共和制末期における地方の農民団体とナチス」九九―一〇〇頁による。十二項目にわたる要請書の内容並びに税務署長との交渉の詳細は、以下が詳しい。Beim Landesfinanzamt. Der Empfang der Abordnung, in: TLB, Nr.10 v.11.2.1928, S.4f.

(27) 参照、豊永、前掲『ドイツ農村におけるナチズムへの道』一八二、一八八頁、伊集院立「一九三〇年のナチスの農業政策とヴァルター・ダレ――革命的農民的千年王国かエリート的人種論的職能身分国家か―」『茨城大学教養部紀要』第一七号（一九八五年）、九頁。

(28) Zit. nach Bauernbrief. Ein nachdenkliches Kapitel über Preise, über's „Nohlen" und über die ‚Nazis', in: TLB, Nr.48 v. 16.6.1928, S.2.

(29) Zit. nach Für Geschlossenheit und Rettung des Landvolkes. Die Wählarbeit der N.S.D.A.P. im Landbunde. Hauptversammlung des Thüringer Landbundes, in: TLB, Nr.5 v.17.1.1931, S.1; vgl. Rundschreiben vom 16. Dezember 1930, in: Bundesarchiv Berlin (künftig: BA/Berlin), NS 26, Nr.951.

(30) 以上の叙述は、拙稿、前掲「ヴァイマル共和制末期における地方の農民団体とナチス」一〇五頁による。

(31) 詳しくは以下を参照。Unsere Gedanken marschieren. „Bauer, hilft dir selbst !" Hitler in Weimar, in: TLB, Nr.12 v.11. 2.1931, S.1.

(32) 以上の叙述は［Bayerischer Bauernblatt ?], Nr.22 v.7.3.1931, in: BA/Berlin, R8034 II, Nr.2975, Bl.89; Der Nationalsozialist,

Nr.121 v. 4.7.1931, in: BA/Berlin, R8034 II, Nr.2975, Bl.145; Nationalsozialisten begehen Landfriedensbruch und verprügeln einen Junglandbündler, in: TLB, Nr.52 v.1.7.1931, S.2.

(33) Baum an Dr.Kästner am 30.6.1931, in: ThHStAW, Thüringisches Ministerium des Innern (künftig: ThMdI)/P 157, Bl.206; vgl. abgedruckt in: TLB, Nr.52 v.1.7.1931, S.2.

(34) Thüringisches Ministerium des Innern, Weimar, den 2.7.1931, in: ThHStAW, ThMdI/P157, Bl.216.

(35) Thüringisches Kreisamt, Weimar, den 4. Juli 1931, in: ThHStAW, ThMdI/P157, Bl.219.

(36) Aus dem Thüringer Junglandbund. Kameraden !, in: TLB, Nr.54 v.8.7.1931, S.3.

(37) Weimarischer Bauernbund. Die ‚deutsche' Art der ‚Nazis' - Der ‚klassenkämpfelische' Landbund !, in: TLB, Nr.52 v.28.6.1930, S.3. 並びに参照、拙稿、前掲「ヴァイマル共和制末期における地方の農民団体とナチス」一〇三頁。

(38) Denkt an Vippachedelhausen !, in: TLB, Nr.53 v.4.7.1931, S.4.

(39) Gies, NSDAP, S.364. 豊永、前掲『ドイツ農村におけるナチズムへの道』一八四頁。

(40) Vgl. Thüringisches Staatsarchiv Rudolstadt, Thüringisches Kreisamt Rudolstadt, Nr.765.

(41) Thüringische Polizeidirektion Weimar an das Thüringische Ministerium des Innern am 23. November 1931, in: ThHStAW, ThMdI/P163, Bll.168f.

(42) Baum vor dem Thüringer Landvolk. Überfülle Versammlungen in Eisenberg und Hildburghausen, in: TLB, Nr.92 v.18.11.1931, S.1.

(43) Parteiwesen in der Kammer ? Für den Berufstand, nicht für Parteigekläff !, in: TLB, Nr.91 v.14.11.1931, S.1f.

(44) Der Stadtvorstand in Eisenberg in Thüringen an das Thüringische Ministerium des Innern in Weimar am 28. November 1931, in: ThHStAW, ThMdI/P163, Bl.185.

(45) Ebenda, Bll.185 u.185RS.

(46) Das Gebot der Stunde. Weitere Verschärfung der Lage der Landwirtschaft.-Falsche Handelspolitik.-Immer noch Devision für überflussige Einfuhren.-Verelendung des Bauerntums.-Eine notwendige Warnung !, in: TLB, Nr.70 v.2.9.1931, S.1; Die Wurzel der Agrarnot. Schwindende Kaufkraft der landwirtschaftlichen Erzeugnisse, in: TLB, Nr.72 v.9.9.1931, S.1; Die sinkenden Agrarpreise. Was geschieht für die bäuerliche Veredlungswirtschaft ?, in: TLB, Nr.90 v.11.11.1931, S.1.

(47) 参照、豊永、前掲『ドイツ農村におけるナチズムへの道』一八四頁以下、伊集院立「ナチスと農村同盟の地域支配、一九三〇―一九三二」『茨城大学教養部紀要』第二〇号、一九八八年、六二、七九頁。

(48) 豊永、前掲『ドイツ農村におけるナチズムへの道』一八三頁。

(49) Der Bauer sagt sich los von der Cliquenwirtschaft im Thür. Landbund, in: Der Nationalsozialist, Nr.101 v.30.4.1932, in: BA/Berlin, R 8034 II, Nr.2975, Bl.199; Finanzielle Fesseln des Thüringer Landbundes !, in: Der Nationalsozialist, [Nr. ?] v. 21.5.1932, in: BA/Berlin, R 8034 II, Nr.2976, Bl.8; Die Flucht aus dem Thür. Landbund !, in: Der Landwirt, Nr.123 v.28.5.1932, in: ebenda, Bl.15; Die Landbund = Quertreiber, in: Der Nationalsozialist, Nr.157 v.7.7.1932, in: ebenda, Bl.29.

(50) 「ドイツ的キリスト者」については、とりあえず以下を参照。Meier, Kurt: Die Deutschen Christen. Das Bild einer Bewegung im Kirchenkampf des Dritten Reiches, Halle (Saale) 1964; vgl. Heimsuchung. Die evangelische Kirche und das Dritte Reich. Ein Film von Jost von Morr, Berlin 1983.

(51) ThHStAW, ThMdI/P164, Bl.192.

(52) Glänzender Verlauf des Bauerntages in Sondershausen, in: TLB, Nr.41 v.25.5.1932, S.1f.

(53) 以上の引用は、拙稿、前掲「ヴァイマル共和制末期における地方の農民団体とナチス」一〇三―一〇四頁による。

(54) TLB, Nr.41 v.25.5.1932 (wie Anm.52), S.1f.

(55) Ebenda.

(56) Wer ist der Störenfried ?, in: TLB, Nr.57 v.20.7.1932, S.2.

(57) Die Weihe des Darré = Hauses, in: Die Thüringer Bauernzeitung (künftig: TBZ), Nr.65 v.28.10.1933, S.2.

(58) Feste unseres Dorfes, in: TLB, Nr.73 v.14.9.1932, S.3.

(59) Adolf Hitler Schirmherr der deutschen Bauern ! Um die Einigung des deutschen Bauerntums. Von Gutsbesitzer R. Peuckert, M.d.L., in: TLB, Nr.30 v.15.4.1933, S.1.

(60) 詳しくは、拙稿、前掲「ヴァイマル共和制末期における地方の農民団体とナチス」一一三頁以下を参照。

(61) カムブルク以外の地域における一般の農民会員による反発の様子については、同論文、一一四頁以下を参照。

(62) 幹部会役員リストは次のとおり（Quelle: ThHStAW, Thüringisches Amtsgericht Camburg, Nr.31, Bll.1, 12, 13)。（　）内は前任者名、＊の印は幹部会役員留任を指す。

第一議長　オスカー・ツヴァイクラー博士（Dr.Oskar Zweigler）（アルノー・プーシェンドルフ）

第二議長　＊アルノー・プーシェンドルフ（Arno Puschendorf）（クルト・レーター［Kurt Löther］）

会計　ヴィリー・クヴェンツェル（Willy Quenzel）（クルト・アイゼンシュミット）

事務長　＊クルト・アイゼンシュミット（Kurt Eisenschmidt）（オットー・ハルツ［Otto Hartz］）

ここからも、カムブルク郡農村同盟の指導部は、ナチス指導の下での、旧来の農民エリートとナチスとの提携関係であったことがわかる。

(63) Auszugsweise Abschrift. Camburg; den 2. Juni 1933, in: ThHStAW, Thüringisches Amtsgericht Camburg, Nr.31, Bll.13 u.13RS.

(64) Vgl. Bekanntmachung. Die Landbünde haben die Hauptarbeit zu leisten, in: TLB, Nr.31/32 v.22.4.1933, S.2.

(65) Vgl. Aufruf ! Thüringer Bauern !, in: TLB, Nr.28 v.8.4.1933, S.2; TLB, Nr.30 v.15.4.1933 (wie Anm.59), S.1; Hinein in den Landbund !, in: TLB, Nr.34 v.29.4.1933, S.4.

(66) Große Bauernkundgebungen in allen Kreisen Thüringens, in: TLB, Nr.38 v.13.5.1933, S.5.

(67) Anordnung des Landesbauernführers !, in: TBZ, Nr.53 v.5.8.1933, S.1.

(68) ヒトラーやダレーもこの収穫大感謝祭に参加し、ヒトラーらの演説を聴きに七〇万人もの農民が参加したという。Vgl. Farquharson, The Plough, S.204. 豊永、前掲『ドイツ農村におけるナチズムへの道』二一九頁。ヒトラーの演説の内容については、以下を参照。Rede Hitlers auf dem Bückeberg anläßlich des Erntedankfestes am 1. Oktober 1933, in: Corni, Gustavo/Horst Gies: „Blut und Boden". Rassenideologie und Agrarpolitik im Staat Hitlers (künftig: „Blut und Boden"), Idstein 1994, Dok. Nr.12, S.75f.

(69) Erinnerungen (wie Anm.21), S.72.

(70) TBZ, Nr.65 v.28.10.1933 (wie Anm.57), S.2.

(71) Vgl. Corni/Gies, „Blut und Boden", S.32f.; Dornheim, Landwirtschaft, S.138f.; vgl. Rundschreiben Nr.74/34: NSDAP. Gau Thüringen, Organisationsamt an alle Amtsleiter der Gauleitung, alle Kreisleiter, alle Ortsgruppen-und Stützpunktleiter des Gaues Thüringen der N.S.D.A.P. vom 28.4.1934, in: ThHStAW, NSDAP, Ortsgruppe Kranichfeld, Nr.1, Bll.282f.